

インシデントを経験した看護者の傷つきとそれに対するサポート
- 質問紙調査と面接調査による検討 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
中谷 千鶴

本研究では、インシデントを経験した看護者にサポートを行うための手掛かりを得るために調査研究を行うことを目的とする。

まず、看護師のインシデントの経験状況やインシデントを経験した時の傷つきについて把握し、より良いサポートを行うための手掛かりを得ることを目的に研究1を行った。121名の看護師を対象に、質問紙調査を実施した。その結果、客観的な患者影響レベル(以下、レベル)の深刻さだけでなく、そのインシデントにおける自分の責任の度合いが看護師の傷つきや退職したくなる気持ちに影響を与える可能性があることが示唆された。自分に責任があると感じられるようなインシデントの中で比較すると、レベルの深刻さが傷つきに影響を与え、レベルがある程度以上深刻になると、『看護師としての自己存在の否定』『他者関係での不安』『業務を継続することへの不安』というような形で傷つきが生じる傾向がみられた。また、経験年数と傷つきの度合いには一定の関連があることが示された。

これらの結果をふまえて研究2では、レベル2、レベル3aの深刻なインシデントを経験した時の状況、感じ方、また、辞めたいと思いつつも辞めずに踏みとどまることができた要因について明らかにすることを目的とした。10名の看護師を対象に、面接調査を実施した。その結果、深刻なインシデントは1年目に最も多く、経験年数が増えると減少の傾向がみられた。インシデントを経験しても辞めずに踏みとどまることができたのは、「情緒的サポート」「評価的サポート」「情動的サポート」などの3種類の『サポート』を受けたことであり、どのようなサポートが得られるかは経験年数によって違いがある傾向がみられた。また、自分なりの対処行動としては「情動焦点型コーピング」「問題焦点型コーピング」などの『コーピング』の観点からとらえることができた。

研究3では、研究2をもとに規模の大きい調査を行い、インシデントに関わる一般的傾向を把握することを目的とした。890名の看護者を対象に、質問紙調査を実施した。その結果、深刻なインシデントは1年目が最も多く、その後減少し、初期の4年目までに多くみられた。深刻なインシデントを経験した時、比較的多くの看護者がサポートを受けていたが、経験年数が増えると幾分情動的サポートが減る傾向にあり、受けたサポートとコーピング、自信喪失度とコーピングはある程度の関連があることが明らかになった。

よって、本研究では、深刻なインシデントは1年目が最も多く、4年目までの看護職歴の初期に多いことが明白となり、この時期でのサポートの重要性が示唆された。また、経験年数の浅い看護者には情動的サポートが主に行われ、経験年数が増えると主に情緒的サポートが行われていた。これらのサポートを受けたことがコーピングに関連し、辞めずに踏みとどまることに関わっている可能性があることが示唆された。今後はインシデントの経験が原因となって辞めた人を対象に調査をし、違いを明らかにすることが必要である。